

2-4. 岡崎城下の三大祭りにみる歴史的風致

(1) はじめに

本市の中心市街地は、江戸時代の岡崎城の城下町と東海道の宿場町岡崎宿が母体となっている。東海道と矢作川水運による物資流通及び交通の要衝として発展し、西三河地方の政治・経済の中心であった。太平洋戦争の空襲により市街地の大部分が焼失したが、大規模な復興事業によって現在の市街地の原型が形づくられ、戦後も西三河の中心地としての地位を継承し続けた。

菅生祭、岡崎天満宮例大祭、能見神明宮大祭の「岡崎三大祭」は、江戸時代の町割りの一部や社寺の境内がそのまま残る旧岡崎城下を舞台に、地域の人々が大切に守り続け形を変えつつも毎年行われている。

(2) 岡崎城下

江戸時代の岡崎は、神君家康公の生誕の地、歴代譜代大名の城下町であると同時に、東海道五十三次の38番目の宿場町、また矢作川水運の基地として、賑わいを見せていた。

岡崎城下を通る東海道は屈折の多さで知られ、世に「二十七曲り¹」と呼ばれている。二十七曲りは、延享2年(1745)の『東海道巡見記』には「宿町数五十四町、廿七曲りと云ふ。」とあり、町数²とともに岡崎の町の特色を端的に表すものとして用いられている。東海道有数の宿場町でもある岡崎城下町は、寛文から元禄期頃までの江戸中期に東海道往還に面した町や周辺の町など合わせて領主支配の19町で成立していた。まちなみは東から西へと城内を経て連なり、19町のうち東海道沿いの町数は、投町(現若宮町)・両町・伝馬町(現伝馬通)・籠田町・連尺町(現連尺通・本町通)・材木町・下肴町(現魚町)・田町・板屋町・松葉町(現八帖町八丁町・中岡崎町)の10町で、それらの町中を通る東海道の長さは合計で36町51間(約4キロメートル)もあり、東海道各宿の中で最も長いといわれる。

往還周辺の町数は、十王町・久右衛門小路町(現久右衛門町)・裏町(現花崗町)・上肴町(現花崗町・伝馬通)・六地藏町・唐沢町・祐金町・横町(現本町通)・能見町(現能見町・能見通・東能見町)の9町である。近世岡崎城下町はこれら城下町廻り19町と城主支配外の甲山寺、大林寺、総持尼寺、松應寺、満性寺、随念寺、極楽寺など大小の朱印寺門前町が複雑に入り組んで構成されてきた。

¹ 天正18年(1590)岡崎に入城した田中吉政は東海道を城下町に通した。その際、城下の道を防衛の必要性から屈折の多い道とした。また、江戸時代初期の本多家の整備により、城北へ大きく迂回され、城までの距離を伸ばすことで間道を利用して防衛することができた。

² 町(ちょう)=60間=約108メートルの長さ。

天保末の『宿村大概帳』によれば本陣・脇本陣数は各3軒の計6軒で、これは小田原の8軒、箱根の7軒に続いて浜松・桑名とともに3番目の多さである。また一般旅行者のための旅籠屋は112軒で、これも宮(現名古屋市熱田区)の248軒、桑名の120軒に続いて3番目の多さである。以上の事実からも、岡崎宿は宿場町として東海道往来の重要な拠点の一つとして大きな役割を果たすとともに大きな賑わいをみせていたことがわかる。

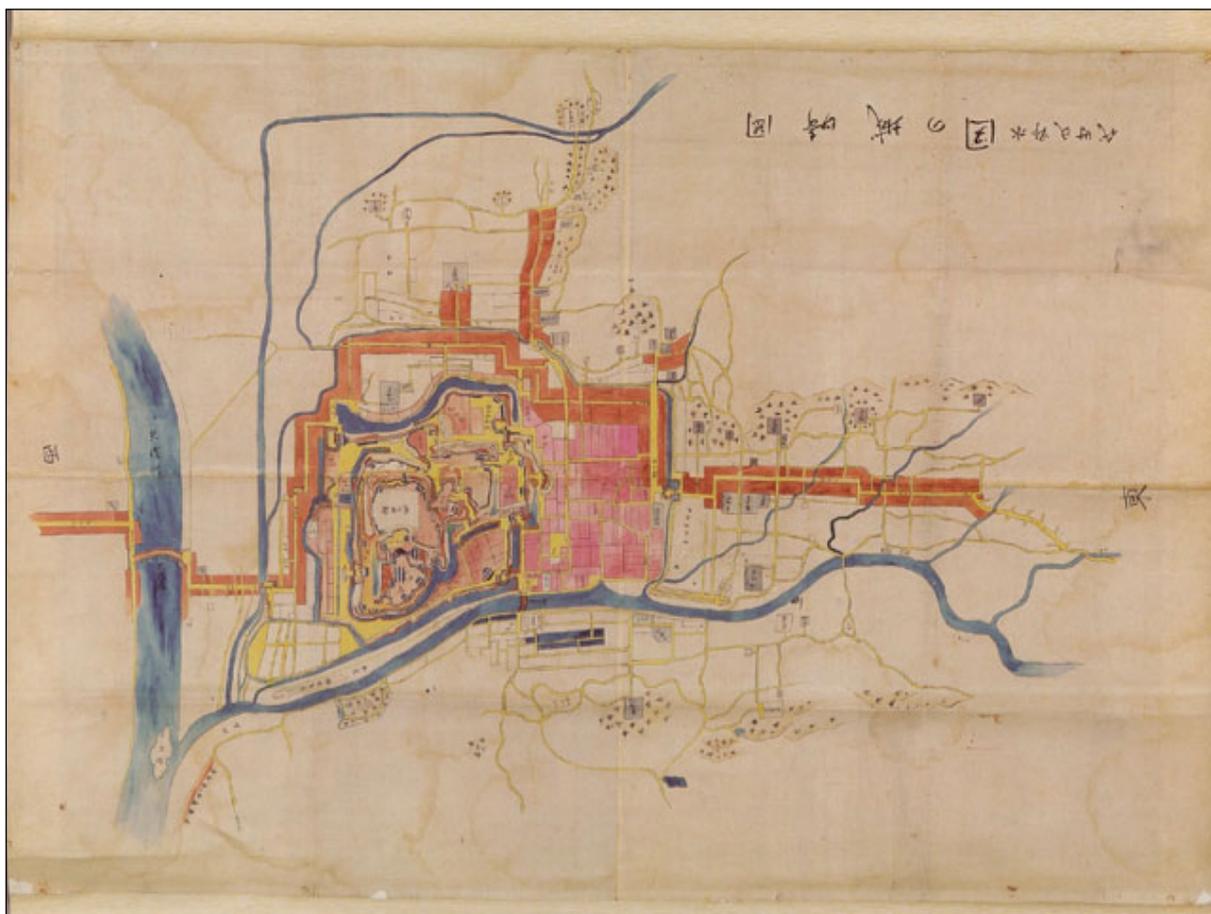


図2-4-1 岡崎城図(水野氏時代(正保2年(1645)~宝暦12年(1762)))

(3)岡崎城下の祭り

東海道有数の宿場町として栄えた岡崎城下は、その経済力や街道の往来によりもたらされた文化等により、城下の発展とともに民衆の力も蓄積され、江戸時代後期には町が実質的なまとまりとなり、産土神^{うぶすながみ}や氏神^{うぢがみ}の神事や祭礼に合わせて華やかな祭りが行われるなど、次第に祭礼行事が興隆し、形態を変容させながら現在に受け継がれている。

江戸時代の庶民の楽しみは何と言っても祭りであった。岡崎城下では、主要な祭りとして、菅生天王社(現菅生神社)、北野天神(現岡崎天満宮)及び能見神明宮の三大祭りが有名で、そ

³ 江戸時代後期では、町・村全体を守護してくれる神を産土神・氏神とも呼んだ。

それぞれの氏子⁴が競って祭りを盛り上げた。当初は例祭日に神事が行われるのみであったが、江戸時代中期頃になると、東海地方で神輿や山車の巡行や、からくり・人形芝居・手踊りなどが盛んに行われるようになり、岡崎城下でも各神社が取り込んでいったとされる。そして江戸時代後期になると花火奉納や派手な祭礼行列が定着するようになっていった。

こうして江戸時代後期には、城下でも大きな神社であった菅生天王社と北野天神、能見神明宮において、氏子が主役となって参加する形が生まれ、内容も創作性に富み、地域生活に根ざした祭りとなった。そしてこれらは武家、町人の身分的な枠を越えて共有され、両者に支えられることとなる。

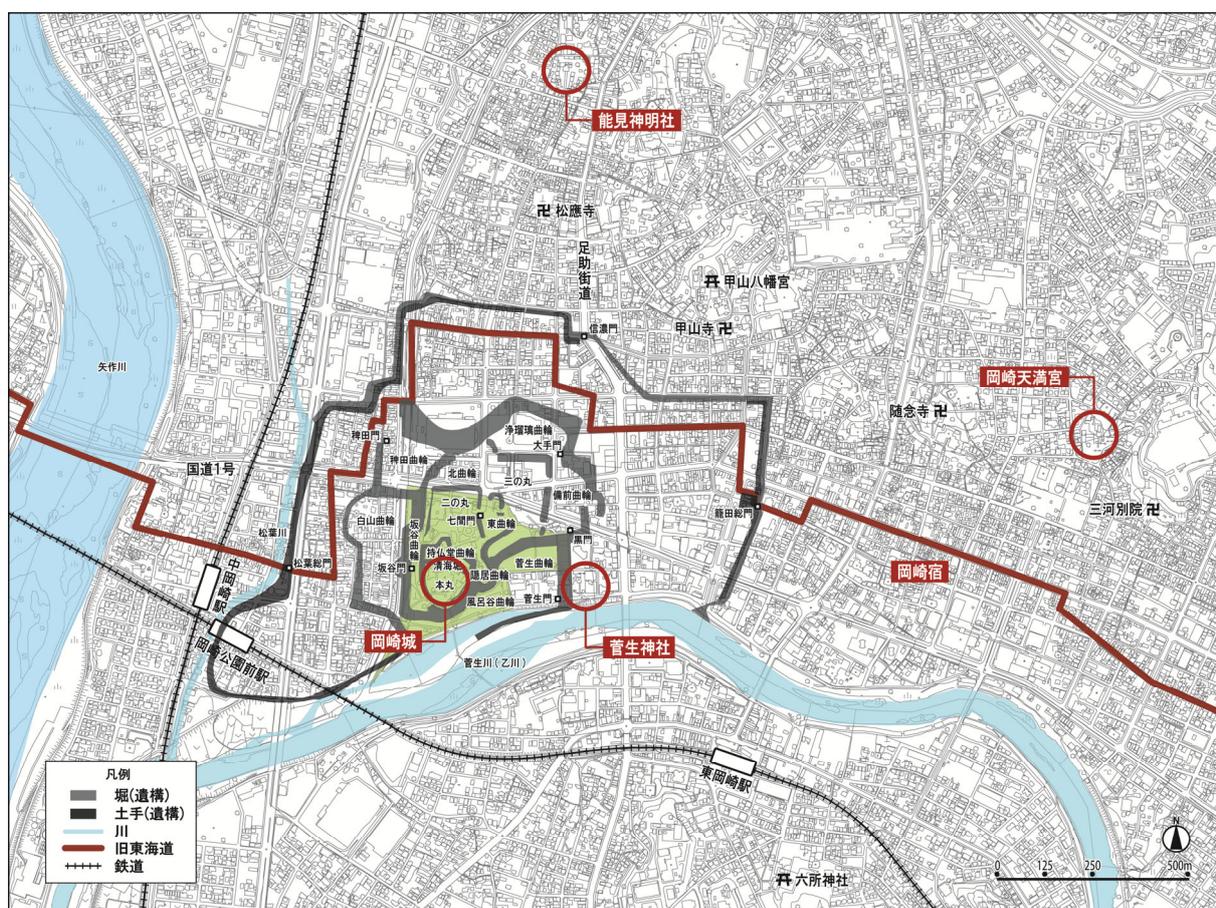


図2-4-2 岡崎城下と関連社寺等の位置図

⁴ 産土神・氏神の町民・村民を氏子と呼んだ。

(4) 菅生祭

① 菅生神社の由緒

社伝によれば日本武尊が菅生の地を通過した際、高石(現菅生町)に伊勢大神を勧請し吹矢大明神と称した。菅生神社が岡崎市最古の神社といわれるのはこの言い伝えをもとにする。永禄9年(1566)家康公が社殿を再建。その後、岡崎城内の当時の殿橋(菅生橋)の東側の地に移転し、歴代岡崎城主の崇敬を受けた城下の総鎮守となった。別名、菅生天王社。現在の本殿は明治27年(1894)、拝殿は明治38年(1905)に建てられたものである。祭神は、天照皇大神、豊受姫命、須佐之男命、徳川家康公、菅原道真公である。



図2-4-3 菅生神社の境内

② 菅生祭の歴史

厄災の除去を祈願した祭礼で、宝暦8年(1758)の『菅生天王宮年中行事』によれば、葦で作った8束の「疫柄」に疫神を負わせて流すというもので、疫病退散の厳粛な神事が中心であった。ところが、津島や吉田(豊橋市)の天王祭りの影響を受けたのか、文政5年(1822)の記録によれば、菅生川(乙川)に提灯を付けた銚船ほこぶねが出され、管弦を奏し、船中から金魚花火⁵や手筒花火が奉納されるようになり、壮麗で賑やかな祭りに変化した。この背景には、城下における花火技術の拡がりがあった。文政元年(1818)には藩主上覧の花火大会が行われ、これには菅生町を始めとする城下各町がそれぞれ打ち上げを行っており、城下町の住民たちも花火の技術を習得していたことがうかがえる。江戸時代の例祭日は6月15日・16日であったが、現在は7月19日に「宵宮祭」、20日に「例大祭」、8月第



図2-4-4 銚船からの奉納花火(大正11年(1922))



図2-4-5 銚船での神事

⁵ 水に浮かび金魚が泳ぐように動く花火。川の流れを火の流れと化し観衆を魅了したと伝えられている。

1 土曜日に「銚船神事・奉納花火」の3つの祭事が執り行われている。「銚船神事・奉納花火」は昭和23年(1948)から「岡崎市観光夏祭り(平成26年(2014)度より岡崎城下家康公夏まつり)」の花火大会との共催(合同開催)で行われ、岡崎の夏祭りとして市民はもとより、近郷近在から多くの見物客が集まる祭りとなっている。

③現在の菅生祭

炎天の下、菅生町・本町連・康生連・祐金町・六地藏町・籠田町の各町からは氏子衆が長持ち唄を歌い威勢よく足を蹴上げながら神社まで、花火玉の長持ちを担ぎ練り込み行列する。先導を先頭に高張提灯と大うちわ、大人用の長持ちに小型の子供用長持ちが並び氏子が続く。行列は岡崎城総構え⁶の東端にあたる中央緑道を出発し菅生川(乙川)沿いを進む。



図2-4-6 長持ち行列の練り込み

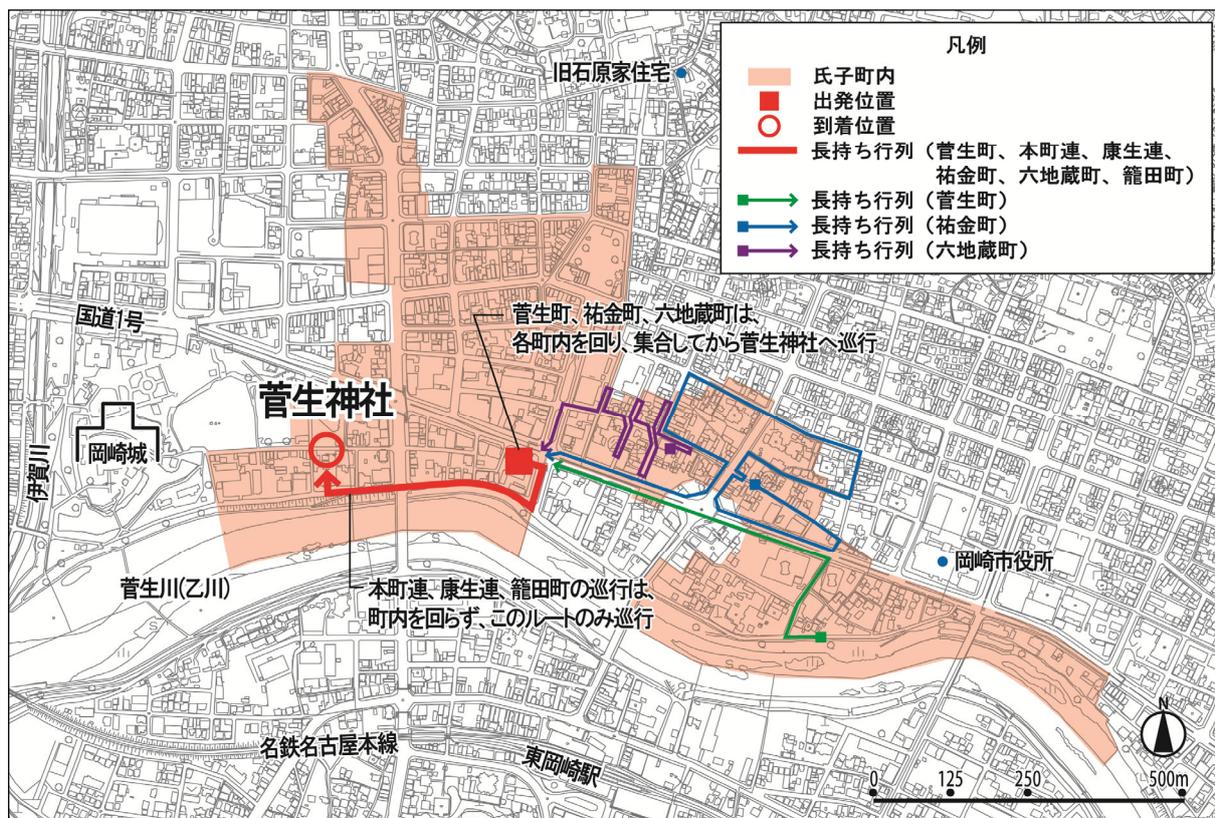


図2-4-7 菅生祭 氏子衆による長持ち行列巡行図

⁶ 城のほか城下町一帯も含めて外周を堀や土塁、石垣で囲い込んだ日本の城郭構造をいう。

神社へ到着すると、神前に奉納者が3名並び手筒花火を奉納する。本殿での神事が午後2時に開始。次に午後2時30分、花火観覧のための棧敷が敷かれた河原に面して浮かべられた2艘の銚船、天王丸・菅生丸に宮司らが分乗し安全を祈願する「船魂祭」が行われ、宮司の祝詞に続き「銚船神事」が始まる。これは船上から葦で編んだ舟形の中に人形、神ひとがた葎みよしを乗せ、菅生川(乙川)に流し、疫神を流すという御霊会の儀式を伝える神事である。午後3時30分、神前にて奉納手筒花火が行われる。宵闇の頃午後7時には、船上の提灯塔に一年の月数を表す12個の提灯を立て並べ、下方に傘状に一年の日数365個の提灯を点じた天王丸・菅生丸より手筒花火を打ち上げ、金魚花火を奉納する。現在でもこのように古礼に基づき、儀礼や祭礼が執り行われ続けている。



図2-4-8 銚船神事(神葎流し)

この美しく風格ある景観は文政元年(1818)より岡崎の名物であり、岡崎城天守を背景に現在も夜空を染める打ち上げ花火と銚船を照らし川面に映る金魚花火・手筒花火は岡崎の夏の風物詩である。

この美しく風格ある景観は文政元年(1818)より岡崎の名物であり、岡崎城天守を背景に現在も夜空を染める打ち上げ花火と銚船を照らし川面に映る金魚花火・手筒花火は岡崎の夏の風物詩である。



図2-4-9 岡崎城天守を背景に菅生川(乙川)に浮かぶ銚船と打ち上げ花火

(5)岡崎天満宮例大祭

①岡崎天満宮の由緒

元は総持尼寺の鬼門除けとして道臣^{みちおみの}命^{のみこと}を勧請し、古くは北野天神、弓弦天神、伴天神と称した。元禄3年(1690)、菅原道真公を合祀して岡崎天満宮に改めた。そして東海道岡崎宿の総鎮守として崇敬を受けた。社殿は昭和20年(1945)戦災で焼失したがその後再建され、現在の本殿は昭和33年(1958)に建てられたものである。祭神は菅原道真公・道臣命。



図2-4-10 岡崎天満宮の境内

②岡崎天満宮例大祭の歴史

元は東海道岡崎宿の伝馬町を中心に行われた祭礼で、氏子は城下の大半を占め祭礼は盛大であった。古き伝統を守り、祭礼日を変更せず、式月式日に齋行している。文政6年(1823)の『御祭礼警護行列帳』によれば、神輿や花笠山車・子供の手踊り等の行列が行われたとある。安政4年(1857)には藩主本多忠民が御馳走屋敷^{ただもと}⁷で見物した。安政4年(1857)の『万留書覚帳』にも同様の内容が記されており、大人の手踊りが29番もあるなど、より派手になっている。その後、江戸時代後期には、奉納花火も上げられるようになり、特に昼間の打上花火は有名で「菅生さんの川花火、天神さんの丘花火」として知られていた。町内ごとに、だるま、将棋の駒、番傘など、特徴的な役物が打ち上げられたという。戦災後は、大規模な花火は民家の密集により休止されている。

③現在の岡崎天満宮例大祭

毎年9月23日から25日に齋行^{さいこう}される例大祭は、氏子の一部の両町・中大門・中天神・東中からは氏子衆が長持ち唄を歌いながら天満宮まで、長持ちを担ぎ練り込み行列する。長持ち唄はどの町も基本的に同じ唄を踊りながら歌うが、イントネーションや細かい歌詞が町ごとに違う。

練り込み行列は、社寺の門前や旧東海道など古くからの道筋を舞台に行われ、歴史や伝統を感じることができる。名物であった大規模な奉納花火は、規模が縮小され、現在は、唯一、中大門のみ、天満宮で花火を上げている。それでも、天満宮の歴史的な建造物を背景に奉納花火が上げられる様は、往時の風情をしのぶ



図2-4-11 長持ち行列の練り込み

⁷ 御馳走とは接待を意味し、屋敷は公用の役人等をもてなす、岡崎藩の迎賓館的な役割を持っていた。

ことができるとともに、境内の南に広がる東海道岡崎宿であった市街地に思いを馳せ、歴史や伝統を感じ伝える貴重な祭礼として重要で、形を変えつつも現在まで受け継がれてきている。



図2-4-12 岡崎天満宮の手筒花火

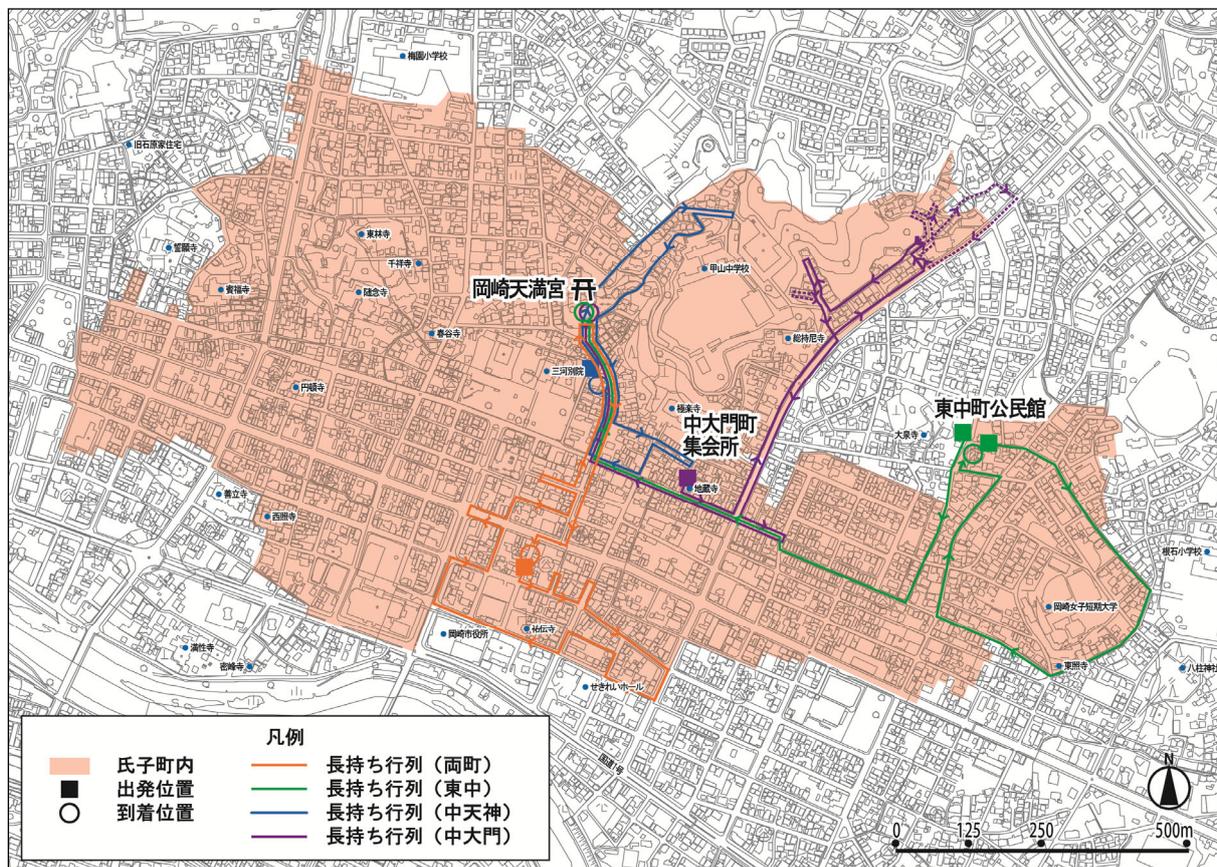


図2-4-13 岡崎天満宮例大祭の長持ち行列巡行図

(6)能見神明宮大祭

①能見神明宮の由緒

社伝によれば創建は鎌倉時代とされ、伝承によると材木町にあったいなさき・いなくま稲前神社(現在は稲熊町へも移転)を、天正 18 年(1590)に田中吉政が岡崎城主になって城地拡大に伴いこの地に移転再興したといわれている。

寛延 2 年(1749)に社殿を再建、明治 42 年(1909)には拝殿が改築され、大正 13 年(1924)には神殿、神楽殿、石鳥居等が建立されている。

祭神は、あまてらすおおみかみ天照大神、よろずはたとよあきつひめのみこと萬幡豊秋津姫命、たちからおのみこと手力男命、とようけひめのみこと豊受姫命、すきのおのみこと須佐之男命、いちきしまひめのみこと市杵島姫命、いそたけるのみこと五十猛命。



図2-4-14 能見神明宮の境内

②能見神明宮大祭の歴史

この祭りの起源については、少なくとも江戸時代中期に始まったものといわれている。幕末には材木町東部の氏子が中心となって山車や花笠を作り、祭りに使うようになった。その後、明治 33 年(1900)に神輿の曳き廻しが行われるようになり、現在行われているような祭りに変わってきた。祭りの重要な大行事は「御神輿渡御」と「山車の曳き廻し」である。「御神輿渡御」が大祭の静の象徴であるならば「山車の曳き廻し」は動の象徴と言えよう。

明治の頃までは二層式、三層式であった山車は、電線が引かれるなどの道路事情により、現在の山車へ改造・新造されたものの、いずれも趣がある。山車の曳き廻しも、戦争の拡大により、昭和 11 年(1936)にいったん中断されたが、昭和 27 年(1952)に復活した。各町独特の昔から伝わるお囃子を大人から子供へと、代々伝えて行くのも良き風習となっている。現在も「神明さん」の愛称で親しまれている。



図2-4-15 能見神明宮の神輿渡御

③現在の能見神明宮大祭

現在は5月第2日曜日及びその前日に行われる。江戸時代中期からほとんど変わることなく現代に引き継がれてきている「御神輿渡御」は、神明宮の御神体を神輿に移して氏子の11か町を巡る祭礼の重要な神事。境内には花笠梵天が参道の両脇に立てられ、東西には芝居の舞台と山車がずらりと並ぶ。先獅子と呼ばれる金色の獅子を先頭に進む数百メートルの行列は、まさに平安絵巻と呼ぶにふさわしいもので、各町に設けられた御旅所^{おたびしょ}では町の安全と繁栄を祈願して御祓いが行われる。

現在、神明宮の氏子には8台の山車があり、各町の特徴を表した法被やゆかた姿も勇ましい大人や子供の手によって、各町独自のお囃子を奏でながら、江戸時代に重要な街道筋であった足助街道を始め、氏子町内を曳き廻される。明治頃までは二・三階建てであったが、道路事情や電灯、電話の引き込み線等のため現在では平屋建ての形に改造されている。町の辻々で止められた山車の前面からは舞台が引き出され、管弦・太鼓に合わせて子ども達の手踊りが披露される。氏子の家の女兒が踊り子となり、身内の人は山車について回って「花」と呼ばれる御祝儀を入れた包み紙を投げる。お囃子や踊りで彩られた山車曳きで、祭りの雰囲気は一層華やいだものとなる。夕方には各山車が神明橋に集まり、いよいよ祭りのクライマックス「山車宮入り」が始まる。午後7時を過ぎた頃、全ての山車の提灯を一斉に点灯し、高張提灯を先頭に動き始める。そして、およそ2時間をかけて、氏子各町をお囃子の音を響かせながら廻り神明宮に向かう。境内に集結した後、8台の山車の舞台では奉納の舞が華やかに行われる。この時、祭りは最高潮に達する。山車の練り歩きは、松本、元能見中、元能見南、城北、柿田、元能見北、能見北、能見中、能見南、材木二丁目の順番で、毎年1町ずつ繰り上げて行われる。前日祭の夜、神社境内において手筒花火が奉納される。打ち上げ後の花火の筒は縁起ものとされ、火災除けとして玄関等に飾られる。



図2-4-16 能見神明宮の奉納の舞



図2-4-17 能見神明宮の山車の曳き廻し

表2-4-1 能見神明宮の山車

町	概要	山車
材木二丁目	建造時期:大正4年(1915)。黒・赤の漆塗り。彫刻「獅子」、「龍」、「象」、「仁王像」、「狛犬」等。天井には昇り龍を中心に彩色された四季の花鳥がとり巻く天井絵が描かれている。山車の前面から引き出された舞台の上で手踊りを披露。	
松本町	建造時期:昭和 35 年(1960)。各所に「矢作橋行列図」や「天の岩戸図」等(江戸兵衛)の彫刻。平成 14 年(2002)、二世代前の山車に飾られていた彫刻「陰陽の龍」が復活。前面から引き出された舞台の上で手踊りを披露。	
元能見中町	建造時期:昭和 26 年(1951)(花車)。昭和 28 年(1953)改造。正面に「牡丹」の彫刻。左右に「神文五三の桐」の透かし彫りにし牡丹の花・藤の花の友禅夢樹の行灯仕立。友禅夢樹(久恒俊治)の行灯は全国伝統的工芸品入選。舞台を引出し手踊り披露。	
元能見南町	建造時期:昭和 33 年(1958)。総白木造りで一本の釘も使われていない。天井の真中に「龍」の彫刻。外側の前面と側面にも「龍」の彫刻が配置。引き出した舞台の上で子どもたち(小学生以下)が踊りを披露。	
元能見北町 城北町 柿田町	建造時期:不明。昭和 31 年(1956)材木町から譲り受けた。山車前面は彩色箔押しされた彫刻で装飾。明治頃までは二・三階建てであったが、道路事情や電灯、電話の引込線等のため現在の形に改造された。	
能見北之切	建造時期:江戸後期に建造された高層式山車を明治中期及び昭和 31 年(1956)に改造。壇箱上山笠形、中備等の彫刻は文政5年(1822)瀬川治助重定の作で主題は「雲水龍」、「波文」、「唐獅子」、「雲鶴」等である。山車前面より舞台を引出し子どもによる踊りを披露。	
能見中之切	建造時期:昭和 28 年(1953)。彫刻「鳳凰」、「龍」(懸魚)、「蓮」、「鶴」(欄間)等。水引幕に赤地に能見中之切、腰幕に紺地に阿吽の獅子、見返り幕に赤地に能中。前面の引出し式の舞台で子どもたちが日本舞踊を氏子町内で披露。	
能見南之切	建造時期:明治初期。各所に極彩色の彫刻。前面の柱には「昇龍下龍」の目にさらしが巻かれており、これを外すと祭礼に雨が降るといふ言い伝えがある。辰年に巻き変えられる。山車から簡易舞台を引出し、踊子連が3曲ほど披露。	

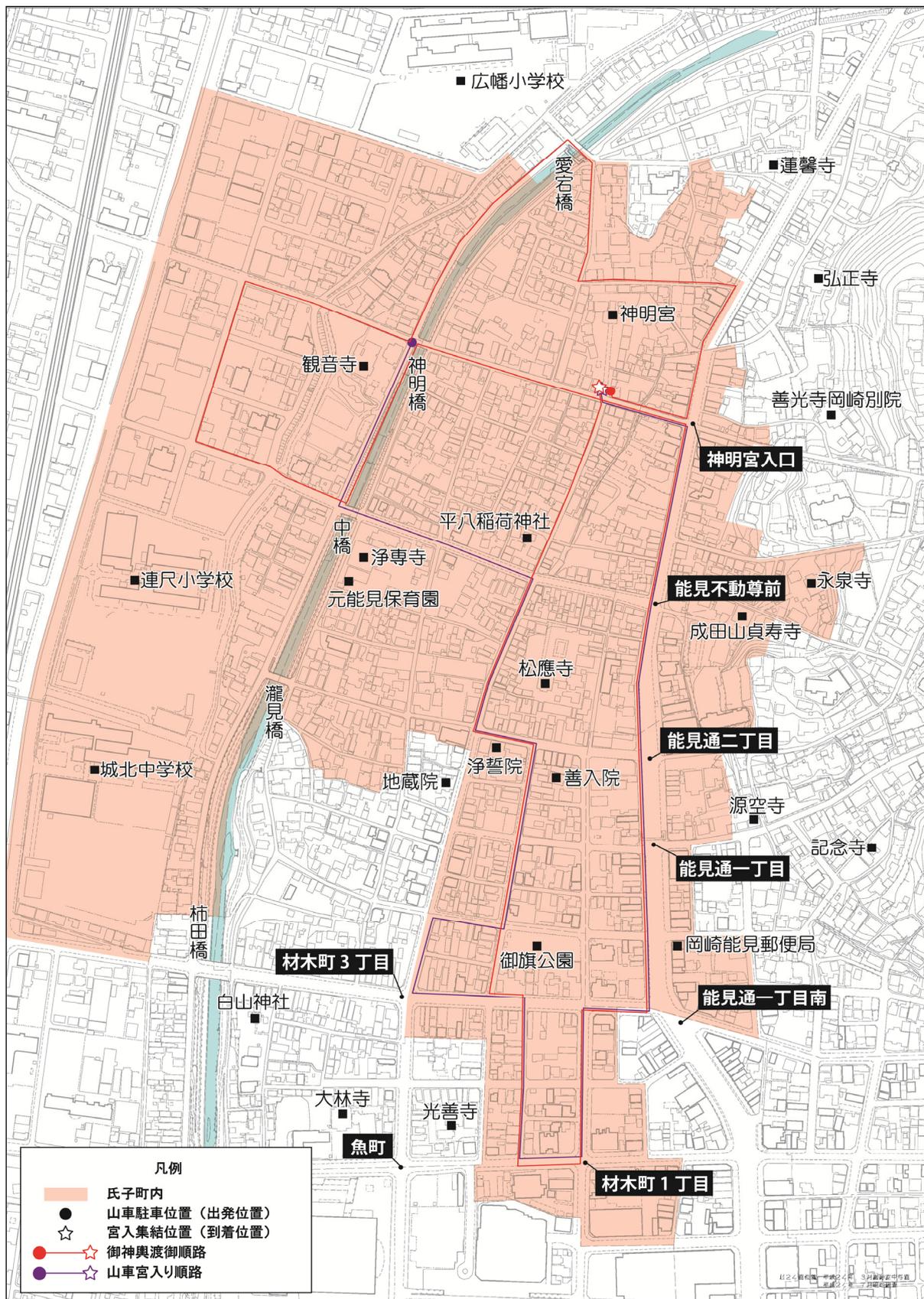


図2-4-18 能見神明宮の神輿渡御及び山車宮入り図(平成 27 年(2015))

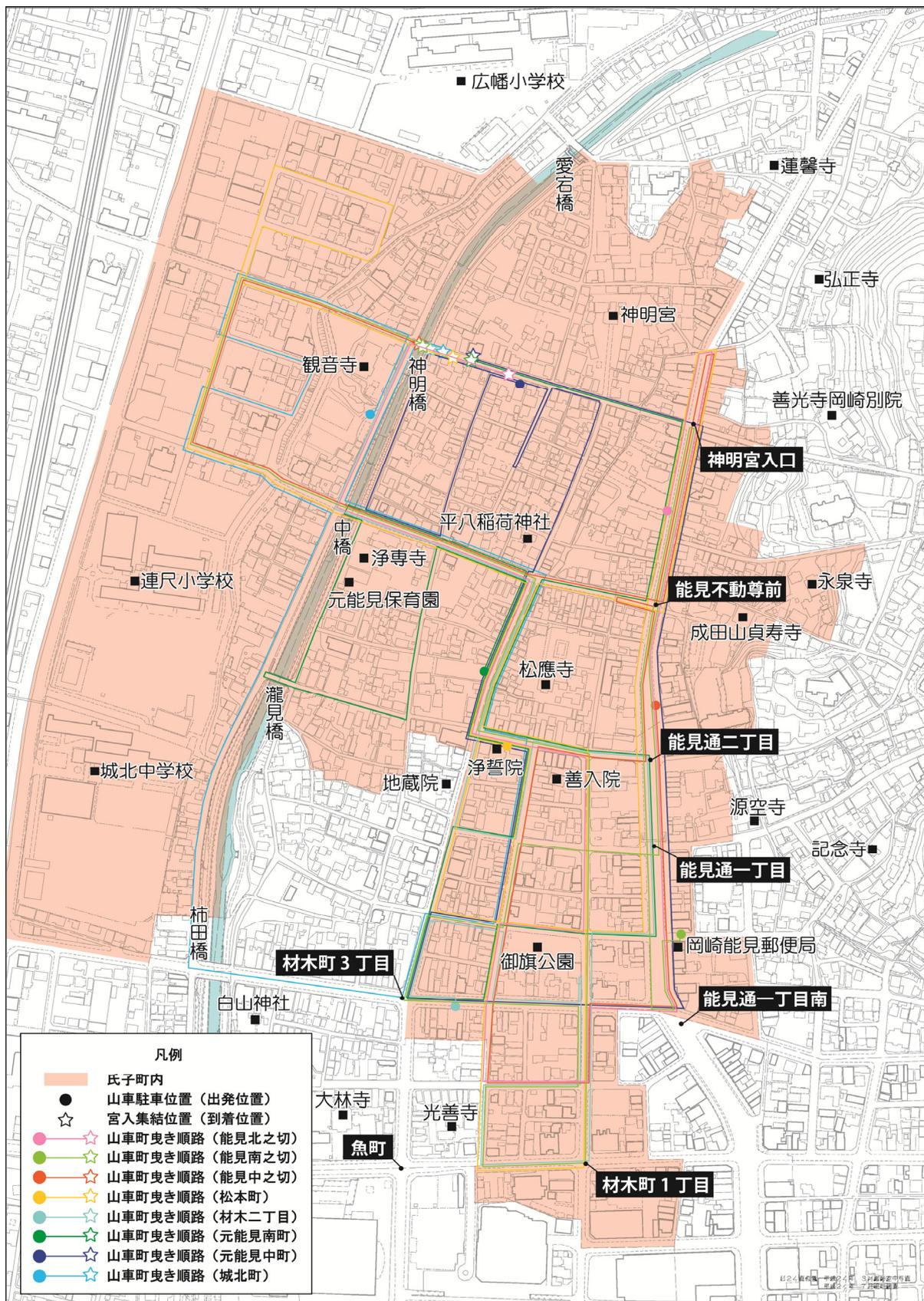


図2-4-19 能見神明宮の山車町曳き図(平成 27 年(2015))

こうした昔ながらの祭礼風景を今に残す祭りは少なく、中心市街地における岡崎の町人文化の伝統を今に伝える貴重な祭礼であり、巡行する町筋の歴史性と相まって、往時の風情をしのぶことができる。

市街地の多くで、狭あいな道路など江戸時代の町割りが感じられ、特に松本町周辺は、永禄3年(1560)創建の家康公の父・松平広忠の菩提寺・松應寺があり、江戸時代にはその門前町として、また大正から昭和40年代までは花街としても栄えた場所で、空襲により町の8割が焼失したものの、松應寺周辺の随所にその面影が残されている。祭りの時期には、岡崎城下の風情と伝統が感じられる場へと舞台転換するのである。



図2-4-20 能見神明宮境内に集結した山車

(7)おわりに

現在では町名変更がなされ、旧来の町名は通称となっているが、自治会組織やその運営、そして祭礼において旧町名のまともりは存続している。お囃子の練習等を通して、町内の人間関係が築きあげられるなど祭礼形態や運営のあり方はその町の性格と密接に結びついており、祭礼の変容は町の展開の一つの表れでもあるが、祭礼は大人から子ども達へと伝えられ、伝統文化を継承していく重要な場となっている。

このように、神輿を担ぎ、山車を曳き回す氏子の勇壮な姿や奏でられるお囃子の笛等の音

色は、江戸時代から連綿と行われてきた祭りの華やかさや、歴史や伝統を反映した人々の心意気を今に伝えるものであり、旧岡崎城下の市街地を舞台に受け継がれてきたこれらの祭礼は、良好な景観を形成し、岡崎城下として栄えた往時の賑わいを彷彿とさせる。

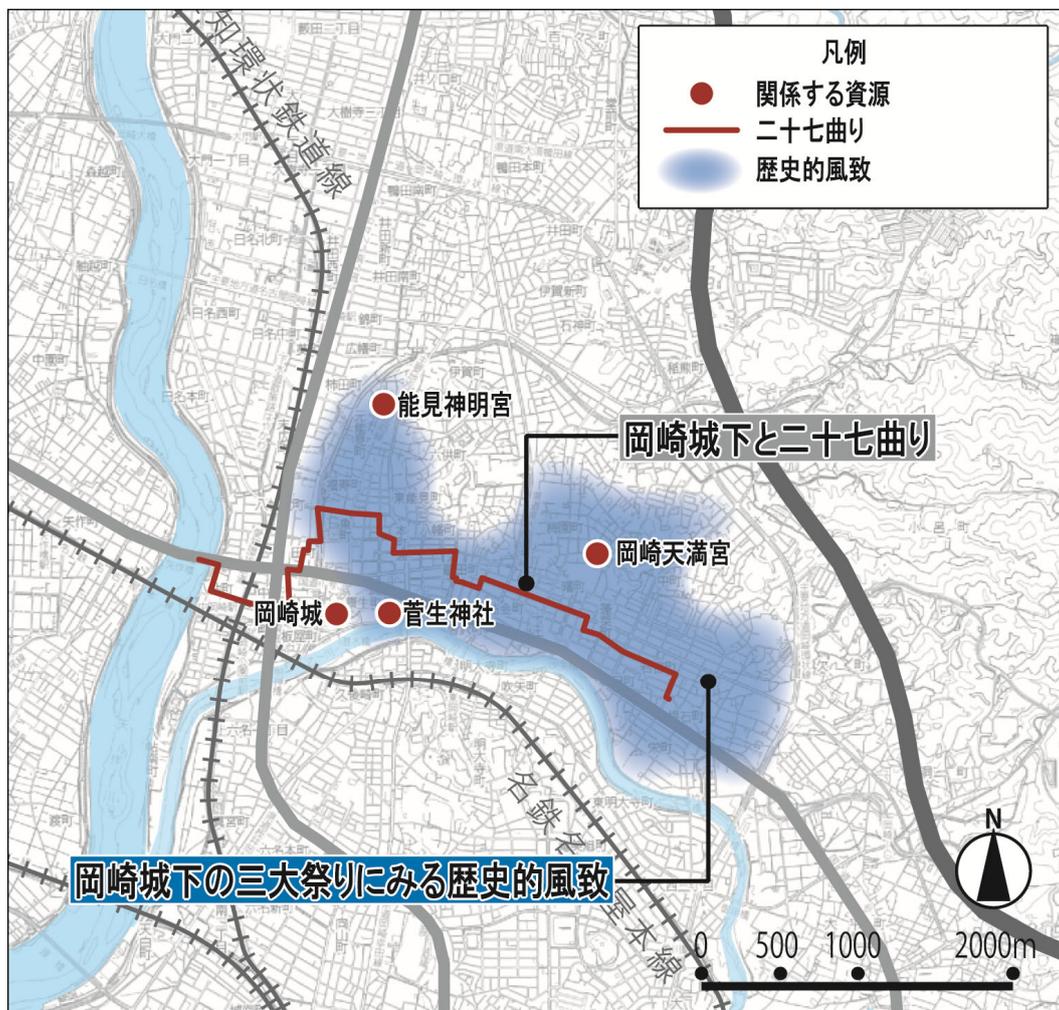


図2-4-21 岡崎城下の三大祭りにみる歴史的風致の範囲